愛知淑徳大学論集 －コミュニケーション学部篇－ 第3号 2003 87－95

非言語学的表現としての物理的余白と時間的空間

――異文化コミュニケーションの見地からの一考察――

Yukiko S. Jolly

Ⅰ．始めに

筆者は約四半世紀にわたって海外に在留した経験を通して、日本文化特有とも言える物理的余白（ブランク）と、時間的余白（或いは通常「間」と呼ぶ沈黙）について、それらのコミュニケーションにおける効果への影響を考慮してきた。物理的余白とはモニター・スクリーン或いは overhead projector （OHP）スクリーンや紙面上等において意図的、又は恣意的に使用するブランクスペースのことを指す。時間的余白とは、周辺言語的要素（paralinguistic elements）を持つ人の話し声や音楽のメロディーによって奏でられる、リズム、拍数の間に現われる、音の高低強弱等の存在しない無音の空間 ―沈黙― を指す。上記の物理的余白（ブランク）と時間的余白（間）の非言語学的特徴と影響を探求し、考察するのが当稿の目的である。異文化間において話者相互の意思の疎通が、当考察の追及した結果を基に、少しでも相手文化を理解するのに役立てば幸甚である。

Ⅱ．物理的余白（ブランク）

一般的に言って、芸術的観点や審美的視点からも日本人は物理的余白を非常に重視していると考えられる。その顕著な例が西洋の油絵と比較した場合の日本の墨絵（大和絵）である。油絵は周知の通りキャンバスに白紙部分を残さない。写実的な絵も、抽象的な絵画も余すところなく塗りつぶしてしまう。一方、墨絵は静物、風景、人物などの花鳥風月的モチーフを普通、黒一色でその濃淡によって遠近や大きさを表現するが、それは画面いっぱいに表現するのではなく、その一部を埋めるにしか過ぎない。では多く残された白紙の部分は何も表現していないのであろうか。筆者はこの余白（ブランク）こそが、画家の意図を、観る者に訴える本来のメッセージなのではないかと考えている。この空間概念の欧米と日本の相違について Edward Taylor Hall（1976, p.55）は以下のように述べている。

> In the West, we are taught to perceive and to react to the arrangements of objects and to think of space as "empty." The meaning of this becomes clear only when it is contrasted with the Japanese, who are trained to give *meaning* to spaces - to perceive the shape and arrangement of spaces; for this they have a word, ma. The ma, or interval, is a basic building block in all Japanese spatial experience.

この西洋の画法による、画面を全て塗りつぶす油絵方式と、空間的余白を審美的と見なす日本の墨絵方式が正面衝突をした場合の実例を、経験を通して紹介したい。 筆者がハワイ大学で教鞭を執っている頃、ある保育園で4歳前後の幼児の非言語行動を観察、研究していたときのことである。中国系も多く住むホノルルでは、現在でも一月下旬には旧正月を振々しく祝う。保母の一人が園児達に、黒の長方形の画用紙を掛け軸用紙に見立てて、その上に黄色の絵の具を染み込ませた、糸巻きの底を押し当てることによって、中国で旧正月のシンボルとされる花、水仙の模様を押させていた。一人の園児が幾つかの水仙模様を押して「できた！」と保母に見せた。保母は「Xちゃん、まだ周りに空間が沢山残っているじゃない。ホラ、残りの空白の部分の画用紙を全部塗りつぶしなさい。」と言った。その園児は自分の席に戻り言われるままに、残りの黒地の画用紙の余白を黄色い水仙で全て埋め尽くしてしまったのである。結果として、その子供の自発的感性に基づく空間、余白に関する美的感覚が否定され、油絵的塗りつぶし方式が強要された例である。

日本人の余白に託するメッセージの送り方は他にもいくつか存在する。例えば手紙の最終部分に添付する一枚の白紙の便箋用紙である。現代のビジネス用通信文には余り使用しないが、個人的な書簡には、まだかなりの日本人がこの余白のメッセージで、文に表せない想いをつづっているのではあるまいか。実質的には全くの白紙であるので、資源の無駄使いであるという現実的な見方もあるであろう。更に子供用の絵本を始め、大人の読む詩集等もふんだんに余白が空けてある。これも紙上のブランクが、詩の語彙が伝えることができなかった叙情的部分を補足しているかのように、生き生きとした意味のある空間であることには間違いない。

それでは欧米人は上述の日本人のブランク、或いは「無」の美意識を理解することはできないのであろうか？ 欧米人と日本人との「無の美学」への感性を比較して香道に造詣の深い神保博行は陳述する。

> 欧米といえども、われわれ日本人と同じ人間にかわりはない。我々の伝統が追及する価値も、必ず理解して共鳴してくれる。例えば香木には伽羅（きゃら）の如き鮮明な芳香のほかに、羅国（らこく）や眞那伽（まなか）という、あるかなきかの微薫を品のよい美とする。最初は戸惑いを隠さないが、そのうち共感するようになるものである。無の美学と呼んだ北欧人もいる。（神保，1996，p.32）

部屋という立体面のブランクに家具という物理的置物を配置した場合、筆者の一般的経験では、国土の狭い日本では部屋の空間をできるだけ広く使用するため、家具を壁側に寄せて無駄なスペースを無くそうと努める傾向にある。一方、広漠な国土を持つアメリカ人、オーストラリア人等は家屋、屋敷、庭も平行して大きいものが多く、家具を壁側に寄せ付けなければならない必要性は必ずしもないようである。

同じ空間でも道路の物理的空間はもっと切実なものがあり、アメリカ人John Younger (2002，p.195)はこう述べている。

> 前にも触れたが、とにかく日本の道路情勢は世界でも最悪だ。狭い、混雑がひどい、走りにくいの、三拍子がそろっている。道路そのものなら地上だけでなく地面より

上の空間に作ることもできる。

物理的なスペースの一種として、車の座席がある。多くの国々ではタクシー等、不特定多数の客が乗るのは、後席の場合が普通と考えられる。しかし、オーストラリアを始め、幾つかの国では階級制度を嫌うため、タクシーやリムジンでも助手席に運転手と一緒に並んで座るのが普通である。タクシーなどに一人で乗って後部座席に座ると、気取った人だと思われる。（Morrison 他，1999，p.15）

筆者にもアメリカの中西部（ミズーリー州）に住んでいた頃、類似した経験を持った。女性大学院生達 3 人が大型乗用車の前のベンチシートに座って走っていた。一番左側がドライバーである。その内、右端の女性が先に車を降りた。筆者は真中に座ったまま、乗っていると、1 分も経過しない間に運転をしていた車の持ち主に“Scoot over, Yuki!”と命令口調で言われ、はっとして右の空間に体をずらせた。この場合、後でわかったことであるが、同性同士が、余分の空間があるにも拘らず、距離的に接近して座っていると、一般的な社会的価値観からしてレズビアン的行動としてみなされるからということであった。

Ⅲ．時間的余白：沈黙の「間」

「沈黙」は文化に深く密着した様々な意味があり、コミュニケーションの方法としては誤解も受けがちである（御手洗，2000，p.33）。何年か以前から懇意にしていた友人の日本人Ｋ氏から、その会話のなりゆきのなかで、それとなく、その長男の結婚式の媒酌人になって欲しい旨の意が伝わって来た瞬間、筆者はある種のためらいを覚えた。それが短くても「沈黙」という形で相手に伝わってしまったため、それまでの長い友情関係と和やかな会話の雰囲気が壊れ、以来Ｋ氏からは、親しく連絡が来なくなった経験がある。僅かの非言語的沈黙が拒絶として解釈された一例である。

御手洗（2000，p.33）は沈黙を二つのタイプに分類している。

> 一つは「話し言葉」での対面コミュニケーションに付随するものと、他の一つは言葉による相互作用とは無関係な沈黙である。人間が言葉を使用する際に、語、句、センテンスの間に必ず千分の一から数秒にいたるまでインターバルを置く。Ｍ．ヴォーカスはこのような沈黙は「パラ（周辺）言語」の延長とみなしている。もう一つのパラ言語的な沈黙は「間」のポーズである。コメディアンや漫才師などは、「間」の取り方の名人といわれている。彼等は、この「無口」の時間を駆使して最大の効果を上げているのである。

Hall（1966，p.8）は時間について、そのコミュニケーションにおける重要性を以下の様に述べている。

> Time talks. It speaks more plainly than words. The message it conveys comes through loud and clear. Because it is manipulated less consciously, it is subject to less distortion than the spoken language. It can shout the truth where words lie.

前項において物理的余白、空間を欧米人は埋め尽くすものと見なしているという一般論を述べた。これは時間的空白、音のない会話の空間いわゆる「間」においても同様のことが想像される。電話等の日常会話の中で、音声の途切れ、ブランクの空間に対して、欧米人は一般的に一種の精神的苦痛、又は焦りを感じるようである。 従って早く次の言葉を見つけて、その気まずさを埋めようと努力する傾向にある。

20世紀末期に活躍した日本人作曲家で指揮者の故黛敏郎のホノルル市内での講演・コンサートで、同氏は舞台に出て来て、ピアノの前の椅子に座り、2分40秒間そのまま静止の状態を続け、微動だにしなかった。無音の沈黙の中、コンサートホールは静まり返り聴衆は自分の呼吸のみが聞こえるような静けさの中に座っていた。 黛は直後の講演の中で、日本人は時間的余白、即ち無音の中に心地よい音を聴く人種であると述べた。例えば和楽器の一つで、能楽、謡曲の演奏に使用する鼓を例にあげて、鼓は叩いた音と次の音の間に比較的長い無音の「間」がある。「イヨッー」という出だしの掛け声の後に、一息入れて「ポン」と響く音を打ち出す。そして又数秒から数分の間、次の「ポン」は鳴らない。この無音（間）が欧米人の耳にはとても長過ぎて、苦痛、苛立ちを覚える。音とリズムで五線紙という空間を埋めるものが音楽、又は演奏であると見なしている欧米人には、このような和楽器は耳に合わず、一種の不協和音として響く。時間的余白の沈黙の世界は非言語（ノンバーバル・コミュニケーション）行動の中でも、一番強いインパクトを相手に送信するのではないかと考える。

直塚（1980, p.26）はアメリカ人教師「ナンシーさん」との会話についてこう述懐する。

> 私は、ナンシーさんと英語で話していると、ことばとことばのあいだに“間”がないので、時々いらいらしてくる。 ナンシーさんは、自分が出したキュー（合図）に、私がことばで応答せずにあまりすばやく行動するので、びっくりするという。ことばと行動のあいだに“間”がないという。 お互いに“間”を求めている領域が違うのだ。

加えて直塚（1980, p.26-27）はイギリス人と日本人の行動パターンにおける時間の相違について、以下の様にも述べている。

> 最近A氏と会って、かつての衝突について話し合ったとき、‘quick action’を求められたことが衝突の原因の一つだった、と述懐していた。例の事件以後、別の日本人から、何度も同じような目に会わされている。英文の校閲を、今日たのんで、明日までに仕上げてほしいという大学教授。十日間で、2千字の原稿を書いてほしいという雑誌の編集者。 英米人による十分な校閲をしないまま辞書の出版にふみ切る出版社などなど。
>
> 時間に追いたてられて、 はやいスピードで仕事を片付けていく日本人の行動パターンと“もっと時間をかけて、 質の高い仕事をやる”ことに慣れているイギリス人の行動パターンとの違いが衝突の原因と考えられる。

但し、イギリス人が全て時間の沈黙と間を理解し得ないということではないようである。以下は英国が生んだ20世紀の代表的な劇作家であるジョージ・バーナード・ショウ（御手洗,

2000, p.32）の名句である：

> 私には沈黙に耐えることが、いかに大切かは充分わかっている。それについてなら、何時間でも語り合える（I believe in the discipline of silence, and could talk for hours about it.）

「コミュニケーション」とはその語彙の構造が示す通り、ラテン語の communicare で、"to share with others"（Kenkyusha's New English - Japanese Dictionary, 2002, p.507）の意とある。従って会話は２人以上の話者が"share"しなければコミュニケーションが成立しない。最近卒業した筆者のゼミ生の一人のＫ子と話をする度に、私の方が精神的な苛立ちを覚えた。それは私の話の第一音節か第二音節が発された直後、すぐ彼女は合槌の積りだろうが、間髪を入れず「はい」と答えて私の言葉をはさみ、こちらはハッとさせられ、次の言葉を発するのを躊躇させられたからである。教師としてはその発話行為で苛立つ前に、聞く側としての、印象と戸惑いとを説明した上で、その癖を直すよう諭すべきだったと、既に就職している彼女に対して、今反省している。

電話での音声的会話を終えた欧米人、或いは一般のアジア人もすぐ受話器を降ろして、電話機に戻してしまう。ところが、日本人の多くは会話が終ってからも一息入れ、特に目下の方、又は用があって電話を掛けた方が、相手が受話器を置いたか否かの「カチャン」という音を確認してから、自分の受話器を置くのが一般的マナーとされている。このブランクの無音の時間を、相互に確かめ合っている姿は少々滑稽ではある。

日本人の多くは訪問客が玄関のドアを出た後、中にいる亭主側はすぐには鍵を閉めない。少し待って、客が遠ざかった頃に「ガチャリ」と遠慮がちな、静かな音をさせてドアをロックする。伝統的には、亭主側も家の外に出て、客が見えなくなるまで見送り、時間的余白を相互に長く保ち、振り返って手を振ったり、おじぎをする客に、亭主側も返礼の意の所作を示して、客への名残りを惜しむ風習が今でも残っている場合もある。従って客は立ち去りながらも亭主に今一度、別れの挨拶の仕草をしようと意図して、後を振り返った時に、亭主側がさっさと屋内に入ってしまっているのを知ると、少々がっかりしたりもする。

異文化コミュニケーション学的見地から考慮すると、世界は時間の正確さ、スケジュールや締め切りの必要性を重要視する M- タイム（monochronic time）文化と、人間が作り出した時間に拘束されるのは不自然で意味がないとみなす P- タイム（polychronic time）文化とに分けられることは周知の通りである。 従ってこの時間的ブランク―約束に遅れて相手を待たせる―のは、否定的な恥ずべき行為である、とみなす国しか存在しない訳ではない。例えば、スペイン、ポルトガル、ギリシャ等はなべてＰータイムの国々であり、特にスペインでは遅れて来る人は、社会的に地位の高い人物とみなされるからである。

村山（1995, p.105）によると

> 日本のあるファーストフード・チェーンでは、注文を受けてから客の前に出すまでの時間を三十二秒以内と規定しているそうだ。 東京のあるレストランでは、統計をとったところ、客が文句を言わずに待っているのは六分間が限度だとわかり、そ

れに合わせたシステムをつくったという。こういう日本の感情で中国を旅したら、腹の立つ材料には事欠かない。

中国人は待たされても、理由の説明がなくても、黙って待っている人が多く、あまりイライラしない。しかし次のような場合、彼等は以下のように腹をたてる。(村山，1995，p.106)

1. 道理が通らないと感じたとき。
2. 不公平と感じたとき。
3. 侮辱されたと感じたとき。

ただし、そう感じてもすぐには怒りを外にあらわさないで我慢する。あるいは観察をつづける。そしていよいよとなったとき初めて行動に出るのだ。それだけに蓄積された怒りのエネルギーはきわめて大きい。日本人は、すぐに小刻みに怒り、しかも忘れっぽいから、爆発する怒りのエネルギーはそれほど大きくないのである。

筆者も中国を何回か訪問し、飛行機を始め公共交通手段の時間への概念、ホテル、レストラン、百貨店などでの従業員の時間的動作、挙動に関しては、日本の顧客が要求するものとは程遠い印象を受けた経験をいくつか持っている。 アジアの某国のＫ空港で午後３時15分発の桂林行き飛行機が、ソラリーボード（発着案内板）に「遅延」と表示されたのが３時30分。その日は夕刻７時を過ぎても「遅延」の文字が動かず、同フライトは翌日、正午頃に出発を試みたが、エンジンの調子が悪く搭乗客達は大雨の中、代わりの小さな飛行機に乗り換えて、(出発予定時刻よりも約24時間遅れて)Ｋ空港を午後２時過ぎ頃やっと出発した。この様な時間の正確さを余り問題にしないP-タイム文化との接触はM-タイムの日本人には極めて苦痛である。

しかし、そのＭ-タイムの日本でも、あるアメリカ人客が愛知県の片田舎の喫茶店で、コーヒーを注文してから、30分待ってもウェートレスは注文に応じなかった。米人男性客は憤慨した様子で荒々しく店を出て行った。何故コーヒー１杯が30分経過しても出てこなかったのか筆者にもよく解らなかった。多分外国人嫌いの店員達であったのだろうと推察する。

しかし一方、現代の日本では「間」が日常生活からなくなりつつあると言われている。御手洗は以下のように述懐している。(2000，p.35)

日本の伝統芸能の歌舞伎、浄瑠璃、能などは「一瞬の静寂」を大切にし、それをしみじみ味わうことを美徳としてきた。しかし、近年はこの「間」に不安を感じている若者が増加している。なぜ「間」に不安を感じるのかに関して社会学的に分析した結果、それは、日本人の生活のリズムが早くなったことが原因であるといわれている。それに最も影響を与えているのがテレビである。例えば、ＮＨＫのアナウンサー室の調査によれば、テレビのニュース・キャスターが１音を１拍として１分間に話す音の数は、ベテランのニュース・キャスターの場合が538拍、1964年当時の男性アナウンサーは46拍である。ところが、テレビ朝日の久米宏さんの場合は何と、1.8倍の767拍にもなる。落語の世界でもテレビの場合、限られた放送時間に収録することを求められるので、かつての古今亭志ん生や三遊亭円生のように、間を上手に使える落語家が少なくなったようである。

一方、Lewis（1996, p.3）は会話における沈黙（間）についても、ある文化においては敬意の現われであると、以下のように述べている。

> アメリカ合衆国、ペルー、クエート等においては、会話は本来双方向プロセスで、相手が話し終わったところでもう一方の話し手が替わって発言をする。ところがフィンランドや日本においては、沈黙は日々のやり取り（interaction）の中で欠かすことのできない部分であり、会話に空白が入るのは相手への敬意の現われであり友好的であると同時に適切なものと見なされている。しかし、あなたの交渉相手はこのことをわかっていない。

ジョリー（1999, p.128）は時間に対する厳守、或いは人の社会行動としての遅延性に関しては、民族性、地域の習慣だけではなく、その言語とも関連があるのではないかと指摘している。

> これは、もしかすると、民族性とか、その地域の習慣というよりも、各々の持つ意味の範囲に何か秘密があるかも知れません。私は日本で生まれ育ったわけですが、青年期、壮年期、中年期を主として英語文化圏で過ごしてきましたので、例えば英語の“later（後で）”は日本語のそれよりも、その時の状況によって待つ長さが短い意味合い（例えば十分から一時間くらい？）を待つような気がしてなりません。京都に滞在中のある日、短期間の日本への帰国中にできるだけ多くの人間と接触したく、その旨相手に面会を申し込み、依頼をすると、「じゃ、後で連絡します。」との返答を受けました。こちらが頼んだ以上「後とは何時のことですか？」とも聞けず、かといって一日中出かけてホテルを留守にしたため、相手からの連絡時にこちらが留守のために失礼したり、折角の面会を逸しては……と考え、貴重な一日をホテルで電話待ちして過ごした経験があります。因みにその相手側は三日後に連絡してきて、「今晩夕食でも」と誘ってくれましたが、もう先約済みで残念な結果に終わりました。

異文化間の日常行動の中で、常に注意を払わなければならないのが「時間」に関する慣行である。P-タイム文化圏とM-タイム文化圏の相違については既に触れたが、自己の文化での社会慣行の時間とsojourner（在外滞在者）としての異文化における慣行の時間は当然同じではない場合が多い。例えば日本では夕食は午後6時頃から7時頃の間が一般的であろう。しかし、ベルギーを始め概してヨーロッパでは夕食は7時から8時の家庭が多い(Morrison他, 1999, p.29)。筆者の知るイギリスの家庭では“afternoon Tea”を午後5時頃ケーキと共に食し、夕食は午後9時から10時頃にとるのが習慣であった。スペインでも1日に5回の食事をするため、夕食は10時前後の家庭が多いと聞き及んでいる。

時間的空間についての異文化間の行動として興味深いのが、中国人、特に広東人の結婚式・披露宴の時間的空間の使い方である。その殆どは夕方から始まる。6時に会場に集合と招待状に記してあったので、遅れて恥をかかぬよう（M-タイム的行動）5時30分に宴会場であるホテルに着いた。既に50人程の客が着座して声高に談笑していた。6時になったが宴会は始まる様子を見せず、その代わり、どのテーブルにもマージャのパイが置いてあり、集まった人々

は振やかにマージャンに興じ始めた。日曜日ということもあり、筆者はその日の朝、11時頃ブランチしか食して来なかったので空腹であったが、マージャンは延々と続き、4時間近く経過した夜9時半過ぎにやっと丸い天板の一枚の上にテーブルクロスを敷き、皿や料理を乗せたまま給仕達が披露宴としての「夕食」をマージャンテーブルの上にポンと置いて行ったその合理性と、素早い時間的空間の変容性に唯、驚嘆するのみであった。

時間的空間の使用法で困惑させられるのは、同一の国内で、M-タイム的要素が期待される行動と、P-タイム的要素が同居する場合である。例えば、ラテン文化圏の南アメリカでは一般的にP-タイムが慣行される。従って、ボリビア等でビジネスの会議も社交的集まりも定刻に始まることは殆どない。ディナーやパーティーに時間きっかりに行くのは失礼にあたる。こうした場合には30分は遅れていくのが暗黙の了解なのである。ところがランチタイムや開宴時間が決まっている催しでは時間厳守というのは紛らわしい。従って、約束の時間について判断し迷ったら“En punto?”（きっかり時間どおりですか）と尋ねて確かめてみるのがよいとされる。（Morrison 他，1999，p.35）

Ⅳ．おわりに

以上ノンバーバルコミュニケーション学的分析による、物理的空白（ブランク）と時間的空白（沈黙又は間）について考察してきた。意思疎通のための空白媒体の使用法も、又時間的な空白の使用法も、当該の文化背景に基づいて生じたものであり、そこで起きる数々の現象に対しては善悪の価値判断は勿論のこと、優劣をつけるものでもない。もし、M-タイムの日本人がP-タイムのインドネシアで否定的な経験をしたとすれば、それは各々の所属文化の非言語メッセージパターンの相違に基づく結果であると考慮すべきである。同じ民族、国民同士の間でも、ジェネレーションの層により、伝統的価値観を維持した非言語行動（例、手紙の最終ページの白紙）を重視する中高年層も、機能をのみ経済的に重視する若年層も同居していることからも判明するように、同一文化、同一地域、同一家族の中でもこれらの行動様式が異なることがある。一方忘れてならないことはsynchronic（共時的）な分析のみで、その文化の特徴を判断してはならないことである。ある文化はその行動の生起、変遷と共に、その非言語行動もまた推移してゆく、diachronic（通時的）な側面も同時に考慮、考察されなければならないのである。

参考文献

ジョリー佐々木幸子 & 小池弘道（1999）『日本の常識はどこまで通じるか：異文化交流で失敗しないために』風媒社

神保博行（1993）『香道ものがたり』めいけい出版

直塚玲子（1980）『欧米人が沈黙するとき：異文化間のコミュニケーション』大修館書店

御手洗昭治（2000）『異文化にみる非言語コミュニケーション：Vサインは屈辱のサイン？ Nonverbal Communication in Diverse Cultures』ゆまに書房

村山　孚（1995）『中国人のものさし・日本人のものさし』草思社

Lewis, R. D. （2001） *When Cultures Collide : Managing Successfully Across Cultures* NAN'UN-DO

Morrison, T. & Conaway, W.A. & Borden, G.A.（1999） 『世界60カ国比較文化辞典』マクミラン　ランゲージハウス

Younger, J. & 尾崎哲夫（2002）『アメリカにあって日本にないもの』自由国民社

Hall, E.T.（1966） *The Silent Language* NAN'UN-DO

Hall, E.T.（1976） *The Sounds of Silence* NAN'UN-DO

Kenkyusha's New English-Japanese Dictionary Sixth Edition （2002） KENKYUSYA